



今回は SGH 運営指導委員会 の報告です。

◇ アドバイザーの方々をお招きし、運営指導委員会を開催しました！

日時	令和 2 年 2 月 13 日 (木) 14:00 ~ 16:00
場所	関高等学校校長室
出席	水野友有氏 (中部学院大学教育学部) 田中淳也氏 (義春刃物株式会社) 三輪 之氏 (関市市民協働課) 安部博貴氏 (県教委学校支援課) 金森香織氏 (県教委支援課) 中村美恵子 (関高等学校 P T A) 平井 学 (学校長) 林 直樹 (研究推進部) 林ちひろ (研究推進部) 梅村はる香 (研究推進部) 石田 朗 (研究推進部)

平成 26 年度、本校では、岐阜県教育委員会が定める「スーパーグローバルハイスクール」実施要項に掲げる趣旨に基づき、魅力ある学校づくりを進める計画立案を行うため、関高等学校 SGH プロジェクト委員会及び SGH 運営指導委員会を設置しています。

運営指導委員会は、1 年間にわたる SGH 活動の総括として例年 2 月に行っています。今年度も、外部アドバイザー、関市役所、PTA 代表、県教委支援課をお招きし、事業報告の上、成果や課題に関する質疑応答、次年度事業に向けた討議を行いました。

SGH 事業 6 年の成果を受け、次年度よりはよいよ FRH (地域共創フラッグシップハイスクール) 事業が始まります。2 時間に及んだ報告と討議の一部を、下記の通り報告します。

SGH6年間の成果

- ・関市市民協働課と連携した 1 年生課題研究、義春刃物と連携した「せきの未来・社会貢献プロジェクト」は、高校生と地域がつながるよい機会となった。
- ・関高校の取り組みが、県内の他の高校にも広がりつつある。
- ・関市役所との幅広い連携ができた 1 年であった。市民協働課にご協力をいただいて研究を進めた。SGH 相談会には、市民協働課、文化課、企画広報課などのさまざまな部署から職員の方にご参加いただき、生徒の疑問に答えていただいた。
- ・1 年生のフィールドワークは関市だけでなく、美濃加茂市や美濃市にも出かけている。また、関市内でも地域は幅広く、市内の中心部に限らず、関市全域へ出かけている。2 年生のフィールドワークは関市外に出かけるケースが多い。フィールドワークは、高校生が学校外で学ぶよい機会となっている。
- ・課題解決型研究ではあるが、解決はできなくてもよい。「解決ごっこ」「課題を考えるきっかけづくり」になればよいと思う。大人になったときに、「問題点を探した」「解決策を考えた」ことが生きる場面がある。
- ・SGH 活動は、生徒が関市に愛着を持つきっかけになっているのではないかと。今後始まる、ふるさと教育にもつながる。関市、岐阜県への愛着につながると思う。
- ・第 2 回目を迎えたダイバーシティ SEKI シンポジウムは、高校生の運営・企画で進めている。おそらく大都市ではできないのではないかと。関市の立地、地域の支援があってできることである。
- ・ベトナム研修の引率で実感したこととして、シャインカービングはよかった。モノを媒介すると異文化コミュニケーションがスムーズになる。
- ・SGH 活動で特別なことをするのではなく、SGH 活動で発揮する力を授業で身に付けるというかたちがさらに整うとよい。各教科で授業改善が進んでいる。家庭科をはじめ。各教科で、コンクールなどに出場して成果を出している。
- ・SGH 活動を通じた経験が大学入試の結果にも生かされている。

次年度に向けての課題

- ・6年間のSGH指定が今年度で最後となる。「総合的探究の時間」を利用した探究活動として、今後も継続することが必要である。
- ・SGH指定が平成26年から始まり今年で6年目となる。来年度からは、地域共創フラグシップハイスクール（FRH）として、引き続き活動していただきたい。
- ・SGH活動が、子どもたちが社会とのつながりを考える機会になるとよい。
- ・今後の課題として3つ挙げたい。週1時間の活動で調査、研究、プレゼン資料の作成を行うということへの時間的な制約があること。フィールドワークを全グループが実施するに当たって、外部の企業等にご迷惑をおかけする場面もあること。今後はこれまで以上に、教員間の目標の共有が必要とされることである。
- ・関市をきっかけとして、フィールドワークや研究の対象を近隣の市町村へも広げていきたい。
- ・教員には「まちづくりに取り組む」という意識で、もっと深入りしてもらいたい。関市と関高校の両者にメリットがあることが望ましい。ここまでの取り組みで、関市のメリットとは何か。活動に関わった職員の一人ひとは勉強になっているが、高校生と活動をともにすることで、関市としてどんなメリットがあるのか。疑問を感じている職員もいる。活動を通して、関市内外に関わらず、生徒のみなさんに関市を好きになってもらえるとよい。
- ・言葉はツール。言葉+アート、言葉+スポーツなど、言葉と体験を組み合わせるとよい。プレゼンを通して紹介して終わりではなく、体験できるものは必要。知らないことを英語で説明するのは難しいが、知っていること、自信のあることを英語で話す機会があれば話しやすい。異なる言語の相手と交流する際に知っていることや自信のあることを話すというのは大事なことである。
- ・課題研究を、単年ではなく次年度へ引き継ぐ方法にはどうか。次年度も同じグループで研究できなくても、別のグループがテーマを引き継いでもよい。
- ・子どもの様子を見ている保護者の立場としては、子どもたちは本当に一生懸命取り組んでいると思う。勉強とどちらが大事なのかと思うくらい、のめり込んでいる子もいる。のめり込んで取り組んだあとの、やり遂げた達成感も大切にしたい。子どもをフィールドワークに送迎したこともあるが、行きと帰りとは子どもたちの会話の内容が違う。表情も、帰りの方が生き生きとしている。そう思うと、単年で完結させるところまでを経験して欲しいと感じる。一方で、やり切れないものを、どのように処理するか。諦め方も教えるべきかとも思う。
- ・自分たちのゴールを、自分たちで決めることも必要。研究を通して、時間の調整や、優先順位をつけることを学んでいる。
- ・どんどん外へ出て、失敗して成長すればよい。いろいろな企業があるので、繁忙期だと断られるということもあるかもしれない。中学生が企業訪問で電話をかけてくることがあるが、こちらの意図が伝わらないこともある。それも経験。
- ・発表会をゴールと捉えてしまう生徒、教員もいる。発表会を通過点として、学び続ける意思のある生徒は、助言をメモする様子がみられる。学び続ける姿勢が育つとよい。
- ・事業の継続性を考えると、講師を招いて講座を行って終わりではなく、教員が関わって、ノウハウを学校に残していくことが必要である。

会議を終えて

SGH活動を支援していただいた田中淳也氏（企業）、水野友有氏（大学）、三輪之氏（行政機関）。保護者代表の中村美恵子氏。県教委学校支援課の安部博貴氏、金森香織氏。様々な立場から、闊達な議論が交わされた。解決すべき課題に関するアプローチに関しても、建設的かつ具体的な提言をいただいた。次年度より始まるFRH事業計画に生かしていく所存である。